

魔女から美魔女へ : 比較文学的に考える

著者	堀江 珠喜
引用	女性学講演会. 18 (1), p.1-14
URL	http://hdl.handle.net/10466/14577

第1回講演

魔女から美魔女へ ——比較文学的に考える——

堀江 珠喜

今年7月2日、小保方晴子氏をスタッフ細胞再現検証実験に参加させるにあたっての厳しい監視体制について、理化学研究所側が会見で「なにか魔法で持ち込むのではないか」との疑念を抱かせないためという旨の発言をした。確かにかつて「科学」が「魔法」と同義語のようにいかがわしいこともあった。錬金術などはまさにその好例であろう。だが、たとえ何かを持ち込まれるとしても、決してそれは魔法によるわけがあるまい。コピーにしても、単に彼女の怠慢の証にすぎない。もし小保方氏が美形の若い女性ではなくて初老男性であったとしても、このような嫌がらせの言葉が吐かれたであろうか。この化学実験に関して「魔法」という言葉が用いられたのは、まさに魔女裁判を連想させる。まるで彼女を「魔法使い」すなわち「魔女」と決めつけているようである。彼女が魔女なら、オレンジジュースからスタッフ細胞を簡単に作り出したことだろうに。そこで今回は、西洋で昔から語られて来た「魔女」から現代日本の「美魔女」まで、その存在について比較文学的に考えてみたい。

《「魔女」という言葉》

そもそも日本語の「魔女」という言葉は明治以降に作られた、英語 witch の翻訳語のようである。(なお10世紀末には「魔女」を「まによ」と読んだ仏教用語があり「魔界に住む女、また悪魔の娘」を意味したがそ

の後は使われなくなったようだ。)『大辞林』によれば、「(1) 古くからのヨーロッパの俗信で人に害悪を与える魔力をそなえているという女性。魔薬や呪法を用いて種々の害悪・病・死などをもたらすとされた。(2) 悪魔のような女。また、不思議な力を持った女」とある。ちなみに『日本国語辞典』はこれらのような定義に加えて「男の心をとらえて離さないあやしい魅力をもった女」や「普通の人にはない、特別にすぐれた能力をもつ女性」と記しているが、この意味については改めて後述したい。

さて『大辞林』が「魔女狩り」を「ヨーロッパの宗教改革前後における、教会ないし民衆による組織的・狂信的な、異端者摘発・追放の運動」とまとめた的確さは、おそらく多くの日本人がこの言葉について持つ誤ったイメージを改めてくれるのではあるまいか。宗教改革は1517年、ドイツ人ルターが教皇レオ10世の免罪符販売を攻撃したことで始まり、その結果、カトリックから分離してプロテスタントが新派を作ったのだ。魔女狩りとは、その時代に、両派が相手を意識し、より厳格な宗教体質を身内に求め、その規範に外れると思しき者を処刑した狂乱の行為、つまりある種の内ゲバとみなすのが適切であるようだ。そしてドイツ圏での犠牲者が多い。(黒川正剛が『図説魔女狩り』で紹介している統計によれば、1600年頃の人口に対する魔女の処刑率がスペインでは27000人に1人なのに対しドイツでは640人に1人、なんとスイスでは250人に1人、リヒテンシュタインでは10人に1人と狂気の沙汰だったことがわかる。)

だが、概して我々は、「魔女狩り」が中世のスペインで行われたようなイメージを抱くきらいがありはしないか。実はこちらは、「宗教裁判」で「魔女狩り(または魔女裁判)」ではない。魔女ではなく異端者を聖職者が審問するのである。つまり被告は「魔法」の類の罪ではなく、信仰のあり方、教義の解釈の相違によって裁かれたのだ。

ところで、日本語がwitchを「魔女」なる言葉で「女性」と決めつけたために、「魔女狩り」を語るときに「男の魔女」といった奇妙な言葉を使わねばならなくなっている。もともと英語witchは男性の魔法使いを表した言葉なのだ。9世紀の古代英語に男性の魔法使いを意味するwicca(ウィッチャ)が使われていたが、この女性形wicceは11世紀になって

登場する。現代英語の witch になってからも男性を表した変遷については『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー』に詳しい。事実 19 世紀までは男性を指すこともあったのだ。ではなぜ、witch が、女性に限定されるように使われ始めたのだろうか。

そのヒントは、アンブローズ・ビアスの『悪魔の辞典』から得ることができそう。これは 1881 ~ 1906 年に彼が週刊新聞に連載した言葉の皮肉な定義を編集し一冊にまとめたものである。これによれば witch は「(1) 醜く胸の悪くなる老女で、悪魔と邪悪な連盟 (リーグ) を結んでいる。(2) 美しく魅力的な若い婦人で、邪悪さにかけては一リーグ (約四・八キロ) も悪魔を引き離している。」(筒井康隆訳) とある。後者は、まさしく『日本国語辞典』の「男の心をとらえて離さないあやしい魅力をもった女」の登場だ。大衆はこれを喜んで読んだことだろう。つまり多くの者は、このような魔女像を歓迎したと思われるのだ。

もちろん (1) の老婆は童話などによく登場する「魔法使いタイプ」だが、(2) なら主役級の人気者になれるだろう。そしてもはや魔女裁判などがない近代諸国においては、大衆文化で美しい魔女が人気を博してゆくのである。おそらくロマンチズムの流行により、人々が幻想的、非日常的存在への憧れを抱くようになったことも、その一因であろう。

《魔女の人気》

たとえば 1930 年代にアメリカのコミックから始まり 1960 年代にはテレビドラマ、1990 年代には映画、そして 2008 年にはブロードウェイミュージカルにまでなった『アダムス・ファミリー』の女主人モティーシャも魔女である。またテレビドラマ『奥様は魔女』や『可愛い魔女ジニー』など 1960 年代に、テレビは魅力的な魔女を放映し続けた。子供向けには、(美女ではないが) メアリー・ポピンズも空を飛んで、魔法を使うことから、明らかに「魔女」である。ただ原作には一言もそうは書かれていない。この言葉が持つ反キリスト教的イメージを恐れたのか、あるいは witch なる言葉で既存のイメージが当てはめられることを避けたかったのかもしれない

い。だがいずれにせよ、この本を愛読する子供たちは皆、彼女の超能力に魅せられるのだ。

私の子供時代（1960年代半ば）にはNHKの人気テレビ番組『ひょっこりひょうたん島』に、魔女が登場した。悪役ではあったが電気掃除機に乗る魔女リカや、マジョリタンの3人の魔女、パトラ、ペラ、ルナの存在感が大きかったことは、半世紀経った今でもよく覚えていることから明らかであろう。その少し後には『魔法使いサリー』が子供向け番組として放映された。

また現代人においても、「魔女」は、体制に対し、大なり小なりうんざりしている、あるいはちょっと好奇心のある人心を惑わせるほどに魅力的な存在だろう。2013年には映画『白雪姫』が2作公開されて話題になったし、2014年は『アナと雪の女王』が大ヒットしたほか、『眠れる森の美女』が『マレフィセント』という妖精の名前を作品名にし、アンジェリーナ・ジョリーがそのタイトルロールを務めるなど、公開前から大作を印象付けた。魔力を持つ雪の女王も白雪姫の継母も妖精も「魔女」である。しかし極めつけはユニバーサル・スタジオ・ジャパンで450億円かけた「ハリー・ポッター」の人気であろう。キリスト教的魔女裁判のない現在、人々は自由に「魔法」の世界を楽しむのである。そして魔法使いや魔女は、ヒーローでありヒロインである。

「悪女」や「毒婦」があつて「悪男」や「毒郎」がないのと同じ女性蔑視の文化土壌がうかがえるが、同時に、男性社会が女性に対する憧れであれ蔑視であれ、（そしておそらく性的に）常に女性に関心を持ち続けていることは事実である。拙著『男はなぜ悪女にひかれるのか』でも言及したが、古今東西のことわざは女性についての悪口が多いし、漢字も女偏の字が「男」の付く字に比べて圧倒的に多い。女性蔑視は女性に対する強迫観念的な興味を裏返しかと思いたくなるほどである。

従って西洋においても男性が美しい女性に興味を持つ以上、「魔女」が醜い老婆ではなく「魔力を持つ美女」であったほうが話が盛り上がるし、男性が性的に墮落するのはこうした魔女の巧みな誘惑によるものだと責任を転嫁したいのである。欲望に負けるのは弱い人間だが、悪魔の力を後ろ

盾にした女の企みからは逃れられないだろう。マーケットもそんな男心を理解しているから、「魔女」を売り物にした話を量産するのは当然なのだ。

事実、西洋の神話・伝説ではキルケのように、美しい魔女が男性を誘惑して、その命を奪うというストーリーが点在する。ちなみにこのキルケがオデュッセウスを虜にし、彼の部下たちを豚に変えた神話の舞台について、イタリア中部のふたつの高級リゾート地、ポンツァとサンフェリーチェ・チルチェオが自分たちの町こそがその場所であると主張して譲らないと『ニューズウィーク』（2014年2月28日号）は報じている。観光客誘致にとって、この魔女伝説が大いに有効なのだ。

近代日本では「魔女」を悪役とみなしても、ヒステリックに退治しなければならない反宗教的対象との感覚はなかった。なにより、我が国で「魔女」という言葉が用いられたときには西洋でも魔女裁判はすでに終焉していたし、日本におけるキリスト教徒人口は1%といわれているほどマイノリティなのである。従って最近はクリスマスばかりではなく、ハロウィンに盛り上がる若者が増え、その経済効果は聖バレンタインデーを越えるとの予想が2014年10月23日付日本経済新聞の春秋で紹介されていたほどだ。今は「愛」より「化け物」の時代らしい。なるほど子供向けには『妖怪ウォッチ』とやらのゲームが2013年に発売されて以来、そのコミック、テレビアニメ、映画、主題歌、関連商品なども大ヒットしている。

《魔女とは誰か》

既に述べたように、一般に魔女狩りはヨーロッパ中世の暗黒時代の迷信深い人々の所業というイメージがある。だが、中世に行われたのは異端審問であり、魔女狩りではなかった。ここでいう異端者とは、時の法王庁と信仰について考え方の違う、ある意味熱心なキリスト教徒であった。しかしそれは法王庁の権威を揺るがすゆえに、対処しなければならなかったのである。

中世にも魔女とみなされた人々はいたが、「有害な呪詛を行う者」であり反キリスト教的存在ではなかった。魔女狩りが盛んになる時代の「魔女

が悪魔と結託している」とみなされたのとは認識が異なっている。実際に魔女狩りが始まるのは中世末だが、本格化するのは西欧においては16世紀後半以降、東欧と米国においては17世紀以降といわれている。そして黒猫を従え、箒に乗って飛ぶという姿も、実は中世ではなく16世紀以降に作り上げられたようである。(西洋では箒は男性性器、猫は女性性器を表すので、魔女が悪魔とみだらな関係にあるとのイメージ発信に効果的である。)

さらに、これも我々が抱くイメージとおそらくは異なるのだが、カトリックよりもプロテスタントにおいて、むしろ魔女狩りは盛んに行われたのだ。先に述べたようにラテン系よりもむしろゲルマン系諸国で数多く真面目に行われた。(ひょっとしたら我々は西洋文化や歴史を、たとえば映画などプロテスタント的ニュースソースから得るきらいがあったのかもしれない。)ヨーロッパにおいて、ルネサンスの開始時期が異なるため、一概にはいえないのだが、1400～1800年のあいだに約5万人が処刑され、その8割が女性であったといわれている。

そしてその魔女狩りは「出エジプト記」22章18節「魔術をつかふ女を生かしおくべからず」という一節が正当化したのである。これはおそらく英語のwitchを訳したものと思われる。英語の聖書ではここで女性とは規定していない。「出エジプト記」の主人公たるモーセ自身も「魔法」を用いている。ただし、体制側の宗教家たちにとって歓迎すべき魔術なら「奇跡」とされ、不都合であった場合は実行者を「魔女」として迫害、処刑したと考えられるのだ。

では西洋では、魔女とは何者だったのか？ 魔法を使った女性が、昔は多かったなどとは誰も思うまい。前述のように国や時代に依っても異なるが、おおむね「女性」が魔女裁判で処刑されたことから、まず産婆＝魔女説が、有力である。その理由には次のようなことが考えられる。

(1) 産婆と教会とは対立関係になりやすかった。

産婆は医学に通じていたため薬草などで薬を作った。ところが、製薬こそ魔女の生業とみなされていた。たとえばシェイクスピアの『マクベス』

で3人の魔女は、第4幕の始めで怪しげな材料を大釜で煮て薬を作っている。(ちなみに外国船での演劇ワークショップでこの魔女役の希望者を募ると、半数以上が手を挙げるほどの人気であった。醜い老婆役ではあるが、演劇好きなら一度は読んでみたい台詞なのである。なにより魔女たちはこの作品の冒頭でも登場して観衆を劇に引き込むという重要な役割を与えられているのだ。名台詞 fair is foul, and foul is fair を3人が口を揃えて言うのは印象的だし、それほどに魔女のキャラクターが魅力的であることの証であろう。)

ところが本来、教会は祈りによって病気を癒してもらう、もし治らなければ、それが神の意志だとみなし、積極的な治療には反対の立場であった。そのような教会にとって、神の慈悲を無視して投薬などで治療する産婆は腹立たしい存在に違いない。

しかし実際的に医療の必要性が認められるようになると、次には教会が、薬の製造を始めた。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』では、二人の結婚に立ち会った神父が、仮死に陥る薬をジュリエットに渡すなど、様々な製薬を行っている。教会によっては同じ建物内に薬局を開くこともあった。すると、教会と産婆は商売敵となる。

また時代と場所によって、産婆は出産において、それが死産などの場合、洗礼を授ける資格を与えられていたらしい。大急ぎで処理しなければ、死者が天国に行けないからである。このとき、産婆と教会とは良い関係にあったようだが、カトリックは今でも女性の司祭を認めていない。そのような女性差別がさらに強かった時代に、このような産婆の特権について聖職者が皆、心から同意していたとは思えない。むしろその失脚を望んでいたのではあるまいか。

(2) 産婆は為政者とも対立関係になりやすかった。

産婆は婦人科系の知識が豊富であったため、出産だけではなく、避妊や中絶の方法も熟知していた。貧しい人々にとって、そのような産婆の助言や処置は有難いものだったが、為政者にとって少子化は国力低下や軍の弱体化の原因となり、徴税にも影響する。教会にとっても区域の信者数の減

少は決して望ましいことではなかった。そこで両者とも、避妊や中絶の知識のある産婆を目の敵にしたのである。

(3) 産婆は一般人とも対立関係になりやすかった。

現在でも分娩が不幸な結果をもたらすことがある。ましてや昔の新生児の死亡率はどれほど高かったらうか。死産や生まれて間もない子供の死が、産婆のせいにされて「殺した」と疑われたのだ。もちろんなかには本当に産婆が失敗したこともあったらう。だが子供が生まれるのを楽しみにしていた者が、その悲しみのはげ口を求めべく、産婆に責任を押し付けたこともあったに違いない。さらには、悪魔の儀式で赤ん坊の死体が用いられると噂されたことから、そのような死体が入手しやすい産婆に「魔女」のレッテルが貼られたようだ。

さらに、教会が医学を認め、男性が医者（内科のこと。外科は床屋が兼業）を名誉ある職業として選べるようになると、男性のみが学べる医学と産婆の民間医療が対立することがあった。医者にかかる経済的余裕のない貧民は産婆にかかり、中産階級以上は医者に治療してもらう。しかしともすれば、当時の医学より民間医療のほうが効果があり、さらに医者と産婆、支配層対被支配層の構図も生まれたのである。産婆が診療、治療、看護まで行うことも患者の容態を常に把握できて好ましかったようだ。いっぽう医者の治療で悪名高いのが「瀉血」で、このため患者はますます衰弱していったのである。

そもそも西洋医学では、白人男性が栄誉を独占する傾向にあった。たとえば1796年にジェンナーが種痘を発見したとされているが、この免疫法はトルコですでにアラブ人によって一般的に行われており、実際に英国の医者も1700年には知っていたが、リスクを伴うので実施しなかった。天然痘に罹ってあばたのできたレディ・メアリー・モンタギューが、1716年、トルコ大使となった夫とともにコンスタンティノープルに渡って、これを知り、英国人医師を説得して4歳の息子に接種させたのが、英国人の種痘の最初と伝えられている。帰国後の1721年に英国で天然痘が流行し、メアリーは3歳の娘にも種痘を受けさせた。彼女の二人の子供の接種が成功

したので、時の英国皇太子も2人の娘に受けさせることにした。伯爵家出身のメアリーの勇気ある行為なので王室をも動かさせたのだが、聖職者たちは納得せず抗議文を書いたほどであった。これが18世紀の英国だったから良かったが、もし16世紀のドイツなら魔女の仕業とみなされたに違いない。ジェンナーはより安全な種痘を開発したことの功績はあるものの、それ以前からいわば人体実験がなされていたことになる。そして、メアリーの英断なくしては、ジェンナーの栄光も考えられないのだ。

《黒い羊＝魔女説》

もちろん産婆以外にも「魔女」はいた。天然痘やペストなどの疫病が、かつては「魔女」のせいと流行すると考えられた。また災害についても、「魔女」のせいにされた。このような災難についての対策が後手に回るのはいつの時代の政府も同じであろう。そこで庶民の不安や不満を解消するため、その責任を「魔女」に転嫁したのである。天災や疫病で愛する家族を失って、やるせない気持ちの人々が、それを企んだ者の処刑を望むのは当然の成り行きである。

そんなときに「魔女」の疑いをかけられたのは、その地域で嫌がられていた者たち、とりわけ独り暮らしの貧しい老婆やユダヤ人、売春婦であった。この独居老婆は童話に登場する魔法使いのおばあさんを連想させよう。守ってくれる男性も財産もない弱い女性はいつの時代も犠牲者になりやすかったのだ。また「魔女」に男性が含まれ、とくにロシアで男性の魔女が多く処刑された理由のひとつは、性別を問わず「ユダヤ人」を「魔女」として迫害したためではあるまいか。また売春婦は「男性をたぶらかす」とみなされたのだろう。キリスト教において「誘惑」こそがもっとも悪魔的な所業なのだ。そしていつの時代も買春者が罰せられることはほとんどない。いずれにせよ、人権という概念のない時代、彼らを酷い目に遭わせても、一般庶民が同情して反論する心配はなかったのである。

しかし文字通りの「魔女裁判」の時代は終わっても、比喩的な意味での魔女裁判はいつの時代にも社会不安とともに起こる。そしてその場合は、

この老婆や娼婦、ユダヤ人のように、根拠無くデマなど誤った情報で、無実の人々が断罪されたり、リンチに遭うのである。それに実際的な暴力が伴うこともあれば、社会から抹殺されるという「死」がもたらされることもある。(『ニューズウィーク』2014年6月24日号によれば、アメリカの「あらゆる形態の差別的偏見」と闘うユダヤ系団体・名誉毀損防止連盟が世界100カ国を対象に行った調査では、「4人に1人が『反ユダヤ感情に染まっている』ことが分かった」そうで、これなどまさに現代の魔女狩りの土壌があることを示していよう。)

さらに、これらの恵まれぬ者たちがほぼ一掃されると、一般市民、とくに小金持ちが狙われることがあった。魔女として処刑することで、教会や為政者が彼らの財産を没収できるからである。その場合、大金持ちは為政者と結びついているので安全だったのだ。魔女であることは拷問によって自白させ、また他の魔女についても密告させればいい。自白しなくても、たとえばコロンビアのカルタヘナでは17世紀の魔女裁判についての展示をする博物館があるが、体重計などで強引に「魔女」と決めつけられた。軽ければ「空を飛ぶ」という理由で、重ければ「体の中に悪霊が満ちている」として、いずれにしても処刑は免れなかったのだ。

《昭和における宮中の「魔女」》

西洋のような魔女狩りの歴史のない我が国のマスコミが「魔女」という言葉を最初に派手に用いたのは、1964年の東京オリンピックで大活躍した女子バレーボール選手たちについてではなかっただろうか。その「東洋の魔女」は、もちろん『日本国語辞典』の「普通の人にはない、特別にすぐれた能力をもつ女性」を表す褒め言葉であった。その興奮がまだ冷めぬ1966年1月3日から1971年7月30日まで、当時の侍従長・入江相政は日記に「魔女」なる言葉で、皇后の女官、今城誼子について酷評し続けた。やんごとなき世界では、やはり言葉の用い方が世間一般と異なるらしい。

このときの事情については、河原敏明著『昭和の皇室をゆるがせた女性たち』(2004)に詳しい。結局のところ彼女は伝統・保守派の良子皇后に

味方し、合理・改革派の入江と価値観が合わなかったのだが、それだけではなく、勤務時間中に飲酒する入江とは対照的に、彼女は自他に厳しかった。そのような勤務態度ゆえに今城は良子皇后の信頼を得たのだが、そのことにまた入江は嫉妬したようだ。

そもそも今城と入江は、どちらも堂上子爵家出身で天皇家とのつながりもよく似ている。今城の父親が明治天皇の生母・慶子の里、中山家の分家に当たるのに対し、入江は大正天皇の生母・愛子の姪を母親としている。もしこの2人の出自レベルにかなりの差があったなら、確固たる上下関係が成立し、騒ぎを起こすこともなかったのではあるまいか。結局、今城は、昭和天皇を味方につけた入江たちに追い出された。おそらくは、良子皇后の権力が宮中においてかなり弱くなっていたのだろう。

今城が辞職した後も、良子皇后は寂しさのあまり彼女に電話をかけたが、ほどなく宮中での電話機が不足しているとの理由で皇后からその一台が取り上げられた。つまり、皇后のためにこの程度のことすら取りなす者が、いなかったことになる。戦後は側近といえどもサラリーマンだから、事なかれ主義に徹していたのだろう。入江にとって、本当に鬱陶しかったのは皇后だろうが、それではあまりに恐れ多いので、今城を目の敵にして追い出し、それによって皇后への嫌がらせを行ったと思われる。

《現代日本の美魔女とは》

このように組織における嫌われ者を「魔女」とみなすこともあったが、それとは対照的に、いつの時代にも「魔法」や「魔女」は人気があった。だからこそ、体制派の宗教組織や為政者には都合が悪く、迫害や拷問、処刑の恐怖によって人々の心を引き戻そうとしたのではあるまいか。「魔女裁判」の時代は遥か彼方であるが、現代における「魔女」とは、次の3種類が考えられる。

- (1) あくまでドラマやアニメーション、アトラクションなど「フィクション」の登場人物。

(2) 社会にとって都合の悪い、忌むべき人々。もはや「魔女」という言葉は用いないが行われることは、かつての「魔女狩り」と同じである。

(3) 日本における美魔女。

そこで最後に「美魔女」について考えたい。池上俊一著『魔女と聖女』（講談社、1992）によれば「中世最古の医学センターというべき南イタリアのサレルノでは、数多くの女性が医学と薬学を学んだようである。女性は婦人病学や化粧術だけではなく、日焼けなど軽い病の治癒も得意とした」ということだ。どうやら女性が学んだのは、いわゆる家庭医学や、化粧品というある種の薬品を用いた治療や予防であったのではあるまいか。しかし医術を施す女性は「魔女」である。つまり、美容術は女性にとって大事な医術あるいは魔術であったと考えられるし、現代日本の美容術を頼みとする美形の熟年女性すなわち「美魔女」は、はからずもここに起源を見出すこともできそうだ。

「美魔女」がもっとも熱心なのは「アンチエイジング」法であろう。プラセンタはコラーゲン以上にその強い味方とみなされているようだが、「プラセンタ」とは胎盤のことである。なんだか産婆＝魔女を連想してしまうのではないか。アンチエイジング化粧品の広告をみると「プラセンタ原液100%の美容液」とあったりする。成分を読むとプラセンタエキスと記されている。プラセンタエキスとは、胎盤の成分をエタノールで抽出したもののだが、これだけではどの哺乳類なのかは不明である。もし本物のプラセンタエキスなら、動物愛護団体が黙っているのがおかしいだろう。もっと奇妙なのは別の広告で、「植物性プラセンタ」なる言葉すら使われていることだ。植物に胎盤があるとは、牧野富太郎博士ですらご存知なかっただろう。

さて、そもそも現代日本の「美魔女」という概念は、40代女性をターゲットにする月刊誌『ストーリー』と『美ストーリー（後に美STに名称変更）』編集長・山本由樹によって2009年後期に仕掛けられた。きっかけは、裕福な夫に顧みられなくなった専業主婦の妻が綺麗になるよう努力し、恋人ができ、夫からも見直されるという事象と、45歳の女性はファッション

よりも美容にカネをかける、なぜならファッションの力だけでは若返れないからという読者の動向を知ったことである。そしてシミ、しわ、たるみの悩みに向き合うアンチエイジング新市場を見出したのだ。

彼の戦略は、「まだ認知されていない、人々の欲望をマーケティングし、それをコンテンツ化、ブーム化できれば、そこには新たな消費が発生」するということである。つまり40代（いわゆるバブル世代）の、まだ女性としてみられたいとの密かなる欲望を見つけ、そのためのノウハウを雑誌で毎月、発信することに成功したのだが、そのときに、すべての40代の女性ではなく、経済的に恵まれたもともと綺麗な女性に的を絞っている。つまり素人セレブをファッション・ビューティリーダーにすることにより、他の女性の憧れを誘うのである。

「美魔女」という言葉は、あるとき山本が写真をチェックしていたとき「この年齢でこの若さって、魔法を使っているとしたか思えないよな。美しい魔女だから美魔女って呼ぼう」という単純な発想によるものであった。さらにこのブームを広めるため、2010年11月、応募資格が35歳以上の女性という「第一回国民的美魔女コンテスト」を開催し、ファイナル20人を読者モデルに採用したのだ。このイベントのタイトルは、もちろん「国民的美少女コンテスト」のもじりである。

「美魔女」という言葉には賛否がわかれるのだが、それはそれだけ強烈な表現ということで、発信力に期待できるということなのだ。韓国の女性誌ではクリスチャンが3割いるため、この言葉がネガティブ過ぎるとして「K-Queen」となっただけだが、これでは良くも悪くも印象に残らないだろう。

このように「美魔女」とは「年齢を超越した若さと美しさを持つミドルエイジ女性」を指す言葉として、今や市民権を得たのだが、これはあくまで日本だけの話である。なぜなら欧米では若く見えることが、さほど重要ではない。日本の男性は、とにかく若い女性を好む傾向があるが、欧米の男性はそうではない。また欧米では、経済的にある程度ゆとりのある女性なら、どんな年齢になってもおしゃれ心を忘れない。欧米は伝統的にカップル社会のため、パートナーとの外出が多いということも、美しいシニア

女性を育てているのだろう。欧米のしかるべき場所の照明は、日本のような明るさ重視ではなく、女性の肌を美しく見せるような色調のものやキャンドルが用いられ、中高年女性の味方である。そのような文化において、いまさら「美魔女」などを提唱する必要はないのだ。

してみれば、昨今の「美魔女」ブームは、日本がまだ男性中心社会で女性が家庭を守り、美容にも服装にも無頓着になってゆくきらいがあり、男性は若い水商売の女性をからめた飲食接待やゴルフ接待で家庭を顧みないという、経済的に恵まれた階層を反映しているのである。もちろん美しくなることは決して悪いことではないが、現代の「美魔女商法」が、美貌の衰えを心配する、経済的余裕のあるアラフォーの不安につけ込んでいることは事実だ。山本自身、「美魔女って、けっこうブスなんです。…彼女たちは『努力する普通の人たち』なんです」と言い切っている。つまり、雑誌情報に忠実にアンチエイジング化粧品、プチ整形、ダイエットなどを取り入れて「努力」すれば、「努力」していないオバサンよりは当然ながら美しく見えるようになるのだ。しかしそのような「美魔女」は褒め言葉ではなく、情報に振り回される自信のない女性の危うい姿にも思えてくる。かつての西洋の産婆は「魔女」として迫害されるリスクを負いながらも、人類にとってなくてはならない仕事をしているとの自負があったはずだ。それに比べて現代日本の「美魔女」は、美容ビジネスに踊らされる虚しい存在とも思えてくるのである。

*本稿は2014年11月8日に行った講演「魔女から美魔女へ——比較文学的に考える」をもとに「読み物」として一部変更・加筆したものである。